インドネシア共和国スラバヤ市の
知的障害養護学校における協働授業研究

筑波大学教育開発国際協力研究センター
中　田　英　雄

Ⅰ．出張期間及び出張者

出張期間：

平成 17 年 8 月 4 日（木）～8 月 14 日（日）

日本側出張者：

1) 中田英雄（筑波大学・教授、筑波大学教育開発国際協力研究センター長）
2) 草野勝彦（宮崎大学・教授）
3) 倉本義則（京都女子大学・助教授）
4) 山本淳一（慶應義塾・教授）
5) 北村博幸（筑波大学附属大塚養護学校・教諭）
6) 佐々木正志（茨城県立鹿島養護学校・教頭）
7) 泉　慎一（東京都立あきる野学園養護学校・教諭）
8) 竹内康二（筑波大学教育開発国際協力研究センター・研究員）
9) 久富みずほ（慶應義塾・大学院生）

インドネシア語通訳：

1) ジャジャ・ラハルジャ（インドネシア教育大学講師）
2) ララン・エルラニ（インドネシア教育大学講師）
3) ザエナル・アリミン（インドネシア教育大学講師）
4) エカ・ワルダニ（ガジャマジャ大学 4 年）

インドネシア側協力者

1) スジャルワント（スラバヤ国立大学特殊教育学科長）
2) ブディヤント（スラバヤ国立大学特殊教育学科）
3) ワギノ（スラバヤ国立大学特殊教育学科）
4) マデチャン（スラバヤ国立大学特殊教育学科）
5) エディ（スラバヤ国立大学特殊教育学科）

Ⅱ．日程及び主な訪問先

8 月 4 日

- 11：25 JAL715 成田発～16：55 ジャカルタ着
- ジャカルタからバンドンへ移動（自動車で 6 時間）
- Hotel Setiabudhi Indah 泊

8 月 5 日

- 9：45 インドネシア教育大学訪問
- 11：00 国立教員研修センター訪問
- Hotel Setiabudhi Indah 泊

8 月 6 日

- バンドンからスラバヤへ移動（汽車で 12 時間）
- Surabaya Hilton International 泊

8 月 7 日

- 15:00 スラバヤ国立大学工学部棟において実行委員会の開催
- 19:00 レストランにおいてスラバヤ国立大学学長らと夕食会
- Surabaya Hilton International 泊

8 月 8 日

- 8:00 スラバヤ国立大学特殊教育学科においてインドネシア側授業実施者と打ち合わせ
- Surabaya Hilton International 泊

8 月 9 日

- 13:00～17:00 スラバヤ国立大学特殊教育学科においてセミナーを開催
- Surabaya Hilton International 泊

8 月 10 日

- 9:00～16:00　スラバヤ国立大学特殊教育学科において協働授業研究 1 日目の開催。主な内容としては、開会式、インドネシア側授業（算数）、日本側授業（算数）、研究協議会が行われた。
- Surabaya Hilton International 泊

8 月 11 日

- 8:30～16:00　スラバヤ国立大学特殊教育学科において協働授業研究 2 日目の開催。主な内容としては、前日の授業に関する研究協議会、日・イ協働授業（算数）、日・イ協働授業（体育）、研究協議会、閉会式が行われた。
- 19:00～21:00Surabaya Hilton International において日・イ反省会の開催
- Surabaya Hilton International 泊

8 月 12 日

- 11:30 スラバヤからジャカルタへ移動（航空機で 1 時間 30 分）
- Hotel Mulia Senayan 泊

8 月 13 日

- 9:30～13:00Hotel Mulia Senayan において日本側反省会の開催
- 22:00 ジャカルタ発、翌 14 日 8:00 成田着

Ⅲ．主な活動の実施内容

8 月 5 日 9：45 インドネシア教育大学本部

1．出席者

インドネシア側：スナリオ（インドネシア教育大学学長）、イサック（インドネシア教育大学副学長）、ハイラル（インドネシア教育大学副学長）、ジャジャ・ラハルジャ（インドネシア教育大学講師）、ララン・エルラニ（インドネシア教育大学講師）

日本側：中田英雄、草野勝彦、倉本義則、北村博幸、佐々木正志、泉　慎一、竹内康二

2．ミーティングの概要

中田センター長は主に以下の点についてスナリオ学長と確認した。

- 8 月 4 日よりスナリオ氏がインドネシア教育大学学長に就任したことに際し、中田センター長はお祝いを述べ、お祝いの品を贈呈した。
- JICA 草の根技術協力（パートナー型）の採択が内定したため、筑波大学教育開発国際協力研究センターとインドネシア教育大学の間の協定を結ぶべきであることを確認した。
- ティディベア協会からの津波義援金 200 万円の送り先として、中田センター長は UPI を推薦した。
- サミュエル・ムリンダ学術振興会特別研究員が学術誌ペダゴギアへ論文を投稿した。
- スナリオ学長は、カブミ舞踊団の日本公演について紹介した。

8 月 5 日 11：00 国立教員研修センター訪問

1．出席者

インドネシア側：ヤヤン（国立教育研修センター主任）、ジャジャ・ラハルジャ（インドネシア教育大学講師）、ララン・エルラニ（インドネシア教育大学講師）、サルマ・ジュリア（国立教育研修センター日本語担当）、アグス（国立教育研修センター障害児教育担当）、他 4 名

日本側：中田英雄、草野勝彦、倉本義則、北村博幸、佐々木正志、泉　慎一、竹内康二

2．ミーティングの概要

- ギンティン国立教育研修センター長が会議のため不在であったため、ヤヤン国立教育研修センター主任とのミーティングとなった。
- ヤヤン主任は、国立教育研修センターの活動状況として、440 名の特別支援教育教員が 3 年間の認定講習（月に 1 度通う）を受けていることを伝えた。
- 中田センター長は、JICA 草の根技術協力（パートナー型）の採択が内定したため、来年度プロジェクトを実施する上で国立教育研修センターを教員研修の場として利用させてほしいことをヤヤン主任伝え、さらにこのことをギンティンセンター長に電話で伝えた。
- ヤヤン主任は、Ai Marian 氏が当研修センターのコンサルタントとなっているので、プロジェクトを協力して進めたいと述べた。
- 中田センター長は、このプロジェクトの目的が良い授業を作ることだとし、日本のノウハウを伝えつつ、インドネシアからも学び、J+I モデルそしてまったく新しいモデルへと一緒に発展させていきたいと述べた。
- ヤヤン主任は、これからも協力関係を作って行きたいと述べ、本センターの特殊教育担当のアグス氏を紹介した。

・ 草野教授は、アグス氏に研修に来ている教員が何に興味を持っているのか尋ねた。これに対し、アグス氏は教員たちが知識の不足を補うための情報を得たいと思っていること、そして教員のグレードを上げたい（例えば、S1→S2）と思っていることを挙げた。
・ アグス氏は、特殊教育教員のための代表的な研修プログラムとして次の 4 つがあることを述べた。①単一事例研究法、②インクルーシブ教育、③スーパーバイズ、④アクションリサーチ。また、インドネシアの特殊教育が主にインクルーシブ学校と特殊学校において行われていること。そして、インクルーシブ学校の場合中学校より小学校の方がより対応が困難であることを述べた。
・ 中田センター長は、インクルーシブ学校に在籍する障害児の障害種別と、補助教員の有無についてアグス氏に質問した。
・ アグス氏は、インクルーシブ学校には視覚障害、聴覚障害、知的障害、学習障害の子どもたちが在籍していること、そして補助の教員はいるのが理想であるが実際はいないことが多いという状況について述べた。また、インクルーシブ学校の現状はインテグレーションにとどまっているので、日本とインクルーシブ教育のノウハウを共有したいこと、現状の調査をしてどんな問題があるのかをリストするつもりであることを述べた。

8 月 7 日 15:00 スラバヤ国立大学工学部棟において実行委員会の開催

１．出席者

インドネシア側：スナルト（スラバヤ国立大学副学長）、スジャルワント（スラバヤ国立大学特殊教育学科長）、ブディ（スラバヤ国立大学特殊教育学科）、ブディヤント（東ジャワ教育委員会）、イスマニア（スラバヤ国立大学附属学校校長）、マデチャン（スラバヤ国立大学特殊教育学科）、エカ・ワルダニ（ガジャマダ大学学部生）

日本側：中田英雄、草野勝彦、山本淳一、倉本義則、北村博幸、佐々木正志、泉　慎一、竹内康二、久富みずほ

２．ミーティングの概要

・ 参加者全員が自己紹介を行った。
・ スナルト副学長は、スラバヤ国立大学が名古屋大学と愛知教育大学との交流をしていること、日本語研修センターを設立予定であることを述べた。
・ スジャルワント学科長は、社会への還元のため 8 月 9 日に日本人のセミナーを開催することを述べた。また、協働授業研究会への参加者の予定が 77 名であり、その内訳は、学校教員 40、大学教員 12、保護者 5、校長 5、大学生 5、教育局職員

2、指導主事 1、教育施設 1、教育委員会 1 などから構成されていると報告した。

・ イスマニア校長は、授業に参加する児童生徒について、10-12 歳の知的障害児 12 名（6 名 1 クラスとして 2 クラス）が参加予定であり、授業内容としては、算数において分数の授業、体育において卓球の授業をする予定であることを述べた。また、協働授業研究会の開催場所はスラバヤ国立大学の特殊教育学科キャンパスであること、参加費は無料で行うこと、参加修了証にはスラバヤ国立大学教育学部長、国民教育省初等中等教育局特殊教育部長、東ジャワ教育委員会委員長、筑波大学教育開発国際協力研究センター長のサインを記入することを確認した。

・ 参加者全員で、協働授業研究会のタイムテーブルについて検討した。

<u>8 月 8 日 8:00～　スラバヤ国立大学特殊教育学科においてインドネシア側授業実施者と打ち合わせ</u>

１．参加者

日本側：中田英雄、草野勝彦、倉本義則、北村博幸、佐々木正志、泉　慎一

インドネシア側：13 名

２．実施内容

※インドネシア側自己紹介

※筑波大学教育開発国際協力研究センター長挨拶

※インドネシア側から

・ 養護学校教員と大学教員の連携について情報が欲しい。

→日本では、大学にセンターを作り、そこで学校と連携をとる。

・ワークショップについて

→大学の先生、教師、保護者、福祉ソーシャルワーカーの４つのカテゴリーを作り、協議を深めていただきたい。

11:00~12:30　知的障害養護学校訪問

※インドネシア側教師より自己紹介

※協働授業についての打ち合わせ

・参加する児童の紹介等

16:00~17:00　スラバヤ大学にて、学長（Haris Supranto 氏）を含めた話し合い

※筑波大学教育開発国際協力研究センター長挨拶

インドネシアで日本の方法がフィットしたら是非広めてほしい。バンドン、スラバヤで実験的な取り組みをし、良い授業とは何かを考えたい。ぜひ、みなさんと良いワークショップにしたい。保護者の参画で地域という要素も入ってくることにも注目して欲しい。

※インドネシア側より、日本の通知票、カリキュラム、授業料、教科書の代金、給食のことなどについて質問があった。

8 月 10 日 9:00～16:00 スラバヤ国立大学特殊教育学科において協働授業研究 1 日目の開催

１．参加者

日本側：中田英雄、草野勝彦、倉本義則、北村博幸、佐々木正志、泉　慎一

インドネシア側：参加者約 250 名

２．実施内容

①開会式

- 東ジャワ州教育委員会委員長挨拶：東ジャワ州の幼稚園，小学校，中学校，高等学校における障害児学級の現状について述べた。
- スラバヤ国立大学第 3 副学長挨拶：今回のワークショップの意義について、特にこの経験から，意欲，自信がつき，今後の研究を進める上でのよい刺激になることについて述べた。
- 筑波大学教育開発国際協力研究センター中田センター長挨拶：ワークショップ開催準備への謝辞と、ワークショップの意義について述べた。
- インドネシア教育省初等中等教育局ムジト特殊教育部長による開会宣言：次の 3 点について述べ、開会の宣言とした。(1)国際交流と障害児教育のジョイント、(2)新しい障害児教育の創世、(3)協働授業の意義。

②キーノートスピーチ（筑波大学教育開発国際協力研究センター中田センター長）

③インドネシア側算数授業（授業者：Syaifuloh,Kustriantini）

分数、特に 2 分の 1，4 分の 1 の指導について以下のような手続きで実施された。

(1) 分数の学習であることを説明

(2) 模造紙を使っての練習問題

(3) 菓子や色紙などの実物を使った練習問題

(4) まとめ（模造紙）

④日本側算数授業（授業者：北村博幸，泉慎一）

すごろくを使った数の指導について以下のような手続きで実施された。

(1) さいころを使ってゲームの順番を決める。

(2) 順番にさいころを振り，すごろくをする。

⑤昼食、休憩

⑥インドネシア側体育授業（授業者：Lilis M,Wahyuhidayah）

以下のような手続きで授業が実施された。

(1) 体操，ストレッチ

(2) おいのり

(3) 歩く，走る

⑦研究協議会

・グループ別協議

9つのグループに分け、それぞれの中でよい授業のポイントについて協議した。

・グループ別発表

それぞれのグループで協議した内容について順に発表した。ただし、時間の制限により、発表は中断され、翌日に持ち越された。

⑧インドネシア報道機関のインタビュー

- Birawa 新聞からのインタビュー：今回のワークショップの意義、過去の成果（バンドンでのワークショップ）、インドネシアと協働授業を行う理由などについて質問を受けた。
- RI TV からのインタビュー：ワークショップの目的、保護者への支援について質問を受けた。
- スラバヤポスからもインタビューを受けた。

<u>8月11日 8:30～16:00 スラバヤ国立大学特殊教育学科において協働授業研究2日目の開催</u>

１．参加者

日本側：中田英雄、草野勝彦、倉本義則、北村博幸、佐々木正志、泉　慎一

インドネシア側：参加者約250名

２．実施内容

①研究協議会（続き）

・グループ別発表の続きとして、学生グループと校長・保護者グループが日本とインドネシアの授業のそれぞれの良い点について話しあった内容を発表した。

②日・イ協働算数授業（授業者：泉　慎一、M , Syaifullah）

分数（１／２及び１／４の概念の学習）の授業を行った。授業時間は 45 分間（9：40ー10：25）であった。

③日・イ協働体育授業（授業者：Lilis　Mardiana、佐々木正志、Lalan Erlani）

多様な走り方や腕も同時に活用した走り方の学習、新聞紙を使った運動について授業を行った。授業時間は45分間（10：30ー11：15）であった。

④研究協議会

・グループ別協議

行政関係者グループ、教員グループ１、教員グループ２、学生グループ、校長・保護者グループに別れ、日本とインドネシアの教師の協働による授業の良い点、知的障害教育におけるよい授業とは何かについて話しあった。

・全体協議

話し合った内容を各グループの代表が発表した。その後、各授業者が自己評価について発表した。

⑤閉会式

以下の順番で挨拶があり、謝辞及び今回の事業の成果、今後の期待について各人が述べた。

・Drs.Puryanto Msi 教授（ソロ大学）

・Drs.Sujarwanto 講師（スラバヤ国立大学特殊教育学科長）

・中田英雄教授（筑波大学教育開発国際協力研究センター長）

・Drs.Syasudi 氏（東ジャワ教育委員会副委員長）

・Prof.Dr.H.Muhari（スラバヤ国立大学教育学部長）

最後に、アンケート記入・回収、修了証授与、サインの記入が行われた。

8 月 11 日 19:00～21:00 Surabaya Hilton International において日・イ反省会の開催

１．出席者

インドネシア側：スジャルワント（スラバヤ国立大学特殊教育学科長）、ブディ（スラバヤ国立大学特殊教育学科）、ワギノ（スラバヤ国立大学特殊教育学科）、マデチャン（スラバヤ国立大学特殊教育学科）、ララン・エルラニ（インドネシア教育大学特殊教育学科）、エカ・ワルダニ（ガジャマダ大学学部生）

日本側：中田英雄、草野勝彦、 倉本義則、山本淳一、北村博幸、佐々木正志、泉　慎一、竹内康二、久富みずほ

２．実施内容

今回のワークショップの意義及び感想について各出席者が以下のような意見を述べた。

ワギノ先生：

自閉症学校の研究に同行してとても勉強になりました。この 4 日間で学んだことを学生に伝えて生きたいと思う。

これまで自閉症の学校では、習った応用行動分析の方法をそのまま使っていただけであったが、山本・竹内の直接的な教示によって何が良い方法なのかわかってきました。例えば、教材の使い方について、これまでは一つの教材に対して一つの使い方しか知らなかったが、同じ教材であってもいろいろな使い方ができることがわかりました。

また、新しい方法として、遊びから課題への移行のためにタイマーを使うことを竹内から教わった。自閉症児であっても時間を学ばせられることがわかりました。

この 4 日間のことは他の自閉症学校にも伝えていく仕事を UNESA が中心になって行っ

てゆきたいと思います。

ブディ先生：
　私とワギノ先生は大学の中で開発チームを担当していますので、今回の経験を生かして自閉症の教育ガイドラインを作り、学校に配布することを考えています。
　多くの学校の先生はただ仕事をこなすことを考えているのが問題だと思っています。そして、多くの教師は UNESA の卒業生なので効率的に情報を伝えていくことができると思います。ガイドラインの作成に当たっては、山本・竹内の支援をお願いしたいと思います。その際には、いただいたパソコンを使って電子メールで連絡を取るつもりです。これからも交流を維持し、わからないときには応えていただければと思います。
　とりわけ CRICED、慶應大学の支援ありがとうございました。

マデチャン先生：
　日本は教材などについて高価な特別なものを使っていると思っていましたが、とてもシンプルなものを使っていたことに感動しました。教え方についても大変勉強になりました。特に、ほめることの重要性についてはあらためて気づかされました。

スジャルワント先生：
　この 4 日間すべてを管理することはできませんでしたが、他の仲間がよく助けてくれました。準備のためんぼ打ち合わせを主に電子メールでのやり取りで行ってきましたが、返信などが遅れてしまって迷惑をかけました。
　このようなすばらしいワークショップをしても、先生の心が変わらなければ成果は維持しません。そのことに我々は気をつけていきたい。これからは、先生の心を動かすために、理論ではなく、保護者を巻き込み一緒に具体的な活動を進めていきたい。
　先生たちが来てくれたおかげで、スラバヤの人たちの心が変わってきたように思います。

佐々木先生：
　初めて会ったインドネシアの人たちに、十分な支援をしていただき気持ちよく一緒に仕事ができました。とても疲れていると思います。ありがとうございました。

泉先生：
　インドネシアの先生と仕事をしてすごいエネルギーを感じました。特に、一緒にミーティングをしたときは積極的な意見を出していただいて大きなエネルギーをもらうことができました。

北村先生：

きめ細やかな援助を受けて本当に気持ちよく仕事をさせていただきました。ありがとうございました。

倉本先生：
立場のある方々にもかかわらず、インドネシアの先生たちは運転手もしてくれました。ありがとうございます。そして、人見知りの自分に親しみ深く関わってくれたインドネシアの子どもたちに感謝しています。

草野先生
「人はみな一人では生きてゆけない」。インドネシアの先生たちはすばらしいチームでした。日本も様々な人からなるチームでした。こういう仕事は一人ではできません。良い仕事というのは一人ではできません。障害児も一人では生きていけません。だからみなで力をあわせていかなければなりません。世界はチームで動いています。「人はみな一人では生きてゆけない」。

ララン先生：
今回のワークショップは前回より良くなりました。それに、このスラバヤの実行委員会はとても小さいのに効率的に良くやっていたことに感動しました。私たちもこの経験を生かして生きたいと思います。

久富さん：
自閉症の学校ではとても勉強になりました。特に、先生たちがやる気をつよく持っている事にびっくりしました。専門書もあまり持っていない中で、よく勉強されていることに感動しました。このことは自分のやる気を高めてくれます。向上心というものを学ばせてもらいました。向上心を相互に学びあう良い機会になったと思います。
お互いに協力する中で学びあうのが国際協力の理想的な姿だと思います。将来ここで得たものをインドネシアに返せるようにがんばっていきたいと思います。

山本先生：
ワギノ先生の暖かいご支援のおかげでとても安心してプロジェクトを進めることができました。実際に、進める中では私たちが学ばせていただくことが多かったように思います。今回協力していただいた 2 つの学校の先生は、とても子どもを大切にしていました。お祈りや歌など自閉症児でも楽しめる活動をする一方で、個別の指導もしていました。これは子どものことを本当に大切に思っているからだと思います。
日本とインドネシアの自閉症児教育を比較すると、日本は教育の技術や技法の追求に偏っているのではないかと思います。インドネシアの先生は、子どもにとって何が良いのか、

何が効果的なのかを良く考えて教育をしている良いうに思いました。そのための方法として、ABA を選んで使っていると思いました。

我々も子どもを大切にする ABA をするにはどうしたらよいのか、考えて行きたいと思います。短い時間でしたが学ばせていただきありがとうございました。

エカさん：

このような貴重な体験をさせていただきありがとうございました。とくに、一番興味がある特殊教育について日々学べる機会があってよかったと思います。

乱暴な日本語があったと思います。お詫びいたします。この関係を大切にしていきたいと思います。

ブディ先生：

今日は特に、先生たちにほめられてとてもうれしく思います。このようにほめられてはいますが、ワークショップの中でいろいろなトラブルもありました。文化の違いがありますので、それに良くぶつかりました。最初、開会式で気づいたと思いますが、車の中で何度も私が電話をしていたのは、そのとき大学にはだれもいなかったからです。これからはもっとスケジュールにあわせて動けるようにするつもりなのでここで言わせてもらいました。

今回のような活動ができたもの、バンドンの先輩たちのおかげと思っています。ありがとうございました。

8 月 13 日 9:30～13:00　Hotel Mulia Senayan において日本側反省会の開催

１．出席者

インドネシア側：スジャルワント（スラバヤ国立大学特殊教育学科長）、ジャジャ・ラハルジャ（インドネシア教育大学講師）

日本側：中田英雄、草野勝彦、 倉本義則、山本淳一、北村博幸、佐々木正志、泉　慎一、竹内康二、久富みずほ

２．実施内容

今回のワークショップ今後の課題について以下のような意見が出された。

佐々木先生：

一緒に授業する人と話す時間がもっとほしかった。学校でやっている授業内容をもっと早く知りたかった。←実行委員会の準備不足。電子メールで指導案のやり取りを事前にすることもできるはず。2 日ぐらい余裕があると良い。

泉先生：
　子どものことについて話し合うことができた。授業の内容について知ることができてよかった。ナショナルカリキュラムの存在を知った。もっと話し合う時間が合った方がよかった。インドネシアのナショナルカリキュラムの話がもっと聞けるとよかった。協働ですることは私にとってすごくよかった。お互いに参考になった。

中田先生：
　事前の情報についてはアーカイブスの中にもあったはず。もっと利用してほしい。

北村先生：
今回の子どもたちはとてもレベルが高かった。私の学校では、もっと重い子どもが中心である。そのため盛り上げながら授業を進める
インドネシアと日本の授業の実態は大きく違う。インドネシアの養護学校の子どものレベルは、日本の特殊学級の子どものレベル。さいころの使用については、その文化的背景を知らなかったとはいえ問題であった。

中田先生：この件は、文化の違いを具体的な例で示してくれた。

泉先生：一緒に授業をやった先生は、初日の授業で批判されたために、教材を捨ててしまった。その授業が良かったことを伝え、教材を拾ってきて使用してくれるようにお願いした。先生は翌日持ってきてくれた。

中田先生：授業をする先生同士の話し合いのために時間を割くべきであり、学長との食事は必要ない。

倉本先生：事前に準備が持ってできていたらよかったと思う。インドネシアの先生たちも大変だったと思う。事前に情報を提供しておくべきと思う。機材特にプリンターについては複数台用意しておいた方が良いと思う。

スジャルワント：現場の先生にとてもよい影響がありました。先生の動機も高くなりました。もちろん私も今度は細かい予定があればよいと思います。ぎりぎりの時間で準備をしていた。

中田先生：一番良いのは、最初の時点で指導案が作成されている状態と思う。しかし、それはとても大変なことだ。今後の課題とする。今回うまく言ったことのポイントは、元留

学生の支援があったからだと思います。それがないとこれはできない。今回の問題は、ジャジャさんがいなかったことである。通訳は難しい作業なのでジャジャ先生の助けを借りたかった。今回はバンドンで時間をかけてしまったが、次回は早めに現地に入って 5,6 日は準備する必要がある。そして現地の先生と一緒に準備することである。そして、2 日の授業と、1 日の協議会、1 日の反省会などを含めて 10 日前後のスケジュールが適当と思う。資金のことについてもある程度準備しておく必要があるだろう。

忘れてならないのは、拠点システム中で教育協力モデルを作るという仕事に関係しているということ。ポイントとしては、対等な立場でやること、そして、良い授業とは何かを集約することである。今回は特に望む以上の準備をスジャルワント先生にしていただいた。昨年は西部ジャワ、今回は東ジャワで実施し、徐々に他のインドネシア主要都市へつなげて行きたい。

また、今回の内容は各自研究論文としてまとめていってほしい。

山本先生：

今回特に早期療育を行っている 2 つの学校を見ることができました。それらの学校には、より良い授業を作っていきたいという意欲がありました。少ない情報の中で、教師たちが何とかやりくりしてよくやっていた。スラバヤにはいくつかの自閉症センターがあるが、学校とそうしたセンターとの連携はあまりできていないようであった。センターが開催するセミナーなどに教師が個人的に参加するとうい程度のものであった。このことの詳細は 8 月 10 日に行った面接調査の結果を分析することで明らかになるはずです。

今回指導を観察した先生たちの中には、とても高いスキルを持っている先生がいました。ワークショップなどを通じて、その事実を先生に伝え、先生の動機付けを高める働きかけができたと思います。ワークショップでは、先生たちの指導を編集したビデオを放映することによって、先生たちの良い点や改善すべき点について議論をすることができました。

ブディ先生には、これまで私たちが作ってきた英語版の自閉症教育ガイドラインの資料を送るつもりです。また、今回撮影した自閉症学校のビデオや、日本の自閉症児の指導の様子をまとめたビデオを送るつもりです。そうした資料をスラバヤ国立大学の先生方が、インドネシア語に翻訳して、学校現場へと伝えてほしいと思っています。

今回できればもっと時間がほしかったと思っています。その日撮影したビデオを夜編集して、翌日のワークショップで放映し、その次の日にはインドネシアの先生と一緒に指導を行いました。もっと一緒に個別指導を行う時間が取れれば、更なる成果があったと思います。

これからは、ＤＶＤやネットワークを通じて情報を伝えられると思います。スラバヤ国立大学とハンドコ校長先生を経由し、現場の先生へとつなげてゆきたい。今回のプロジェクトで関係を築くことができたと思うので、これからはネットワークを介した支援が可能だと思う。

今回関わった自閉症学校はスラバヤの自閉症児教育の拠点となる可能性を持っていると思います。これから、現在筑波大学に留学中の Juang 先生と協働で自閉症教育のテキストやガイドラインを作ってゆきたいと考えています。

体育における協働授業研究

茨城県立鹿島養護学校
佐々木　正志

１．授業研究について

（１）　教科：体育

（２）　対象：知的障害養護学校小学部児童６名（男子５名、女子１名）

（３）　指導内容：Foot Wｏｒｋを高める指導

２．授業の実際

（１）児童の実態

小学部児童６名（男子５名、女子１名）のグループでの協働授業研究をするために、授業前にインドネシア知的障害養護学校小学部児童６名との顔合わせを実施した。ほとんどの児童は日常的な会話を通して学校での様子を簡単に説明することができた。さらに、話し手に向けてしっかり聞く態度もできており、落ち着きがあった。また、インドネシア側の体育の授業においても歩く走る等を中心とした基本の運動には個人差はあるにしても、授業の流れに遅れまいとして努力する姿が随所に見られた。

（２）指導案の作成

今回の協働授業研究を行うに当たり、宮崎大学・草野勝彦教授とともに、インドネシア教育大学のLalan先生の通訳を通じてグダンガン知的障害養護学校（SLGN Gedangan）の協働授業研究者 Lilis Mariana 先生とインドネシア側の体育の授業を取り上げながら、今回の協働研究について指導案を中心にミーティングを進めた。これはインドネシアでは指導案の作成はほとんど行われていないことから、実際に協働で授業を指導する中で目的や流れを確認し、「よりよい授業」を進めるために必要であると確認した。この中でインドネシア側の体育の授業の構成を実際に振り返りながら、今回の授業の中心的な教材として Foot Wｏｒｋを高める指導にポイントをおき指導を構成することに決めた。具体的にはインドネシア側の体育の授業の構成を基本に流れを考え、発展として簡単な動きから少し難しい動きになるように内容を組みながら、それぞれの運動の目標を明確に示すこととした。そのミーティングでは、指導を進めていく学習活動・内容を当日指導者である３名（Lilis Mariana 先生、Lalan 先生、私）で、草野先生の指導を受けながら模擬的に授業の内容を児童の役割と教師の役割を分担しながら実施した。使用する教材教具については、
Lilis Mariana 先生が話し合いを進める中で準備することとなった。その話し合いの結果まとまった指導案（略案）が、表１（日本語)、表２（インドネシア語）である。また、授業

を実施する場所は屋外も考えたが、児童の健康上、屋内施設〔教室：写真１（算数の授業研究を実施する教室)〕とした。また、授業のメインティーチャーは Lilis Mariana 先生、サブティーチャーは、Lalan 先生、私が担当することとした。

教室：写真１

表１　日本語の指導案

知的障害児の Foot Ｗｏｒｋを高める指導

期　日：２００５年．８月１１日（木）
場　所：グダンガン知的障害養護学校
指導者：佐々木正志（鹿島養護学校）
Lilis Mariana（SLGN Gedangan）
Lalan（インドネシア教育大学）

知的障害児は運動の時に動きが遅い傾向にある。
本授業はゲームの楽しい雰囲気の中で，Foot Ｗｏｒｋを高める経験をする。

１　目標
Foot Ｗｏｒｋを高める

２　準備
新聞紙を丸めたボール

３　展開

学習内容および活動	支援の手だて・評価（※）
１　準備運動・ストレッチ お祈り	・運動のできるからだの準備をする。
２　ＷＡＬＫ 前 後ろ Ｊ－Ｗａｌｋ Ｔｈｒｏｗ　ａ　ｂａｌｌ（一人ずつ） 転がっていくタイヤの中にボールを投げ入れる。	・手を水平に保つ。 ・転がすタイヤの速さは、児童の能力に合わせて、配慮する。
３　Ｓｉｌｉｎｇ　ｗａｌｋ（一人ずつ） タイヤを左右に交互に並べる。	・タイヤを置く位置は児童の能力に合わせる。
４　Ｒｕｎ　ａｎｄ　ｊｕｍｐ（2グループ） ジャンプする位置にタイヤを置く。 タイヤの置いてある位置（５ｍ）まで走ってタイヤにジャンプして入り、もう一度ジャンプして方向転換し、スタートの位置まで走って戻る。	・タイヤのある位置で止まることに気をつけさせる。 ・ボールをバトン代わりにする。 ※一人ひとりの児童がＲｕｎ　ａｎｄ　ｊｕｍｐができたかどうか確認する。
５　Ｓｉｄｅ　ｓｔｅｐ　前　後ろ（一人ずつ） ボールを、左右・前後に投げる。	・投げ入れるボールの位置は、児童の能力に合わせる。
６　Ｒｕｎ　ａｎｄ　Ｈｉｔ　ａ　ｂａｌｌ（一人ずつ） 左手で始める。	・全員右利きなので、右手からはじめ、可能であれば左手も試してみる。
７　整理運動・ストレッチ	
８　お祈り	

表２　インドネシア語の指導案

Rencana Pembelajaran

Peningkatan motorik kaki (*foot work*) bagi anak tunagrahita

Waktu: kamis, 11 agustus 2005
Tempat: SLBN Gedangan
Guru：Sasaki Masashi（SLB C Kashima）
Lilis Mariana（SLBN Gedangan）
Lalan (UPI)

Anak tunagrahita memiliki kecenderungan bergerak lambat ketika olahraga.
Dalam pelajaran kali ini anak akan belajar bagaimana cara meningkatkan gerak motorik kaki melalui permainan

1　Tujuan
Meningkatkan gerak motorik kaki

2　Persiapan alat
Bola dari kertas koran

3　Pelaksanaan

Materi pelajaran dan bentuk kegiatan yang dilakukan	Bantuan dari guru dan penilaian (※)
1 Pemanasan Doa	・Melenturkan badan agar mudah digerakkan.
2　Berjalan Ke depan Ke belakang Jalan silang	・Tangan dipertahankan pada posisi rata air
Lempar bola（bergantian） Melempar bola ke dalam ban yang menggelinding	・Kecepatan bola yang digelindingkan disesuaikan dengan kemampuan anak
3　Berjalan melewati ban（bergantian） ban diletakkan secara berdampingan	・Peletakan ban untuk lompat disesuaikan dengan kemampuan anak.
4　Lari dan lompat（2 kelompok） Ban diletakkan pada posisi anak melompat Anak berlari sampai tempat dimana ban diletakkan (5 m dari garis start), kemudian lompat masuk kedalam ban, lalu lompat sekali lagi, dan berbalik badan kembali ke garis start sambil berlari	・Mengingatkan anak agar berhenti ketika sampai di posisi ban diletakkan. ・Bola dipakai secara estafet (※) Guru memperhatikan apakah setiap anak bisa lari dan lompat
5　Lompat kesamping depan belakang menangkap bola（bergantian） Melempar bola ke samping kanan dan kiri kemudian ke depan dan belakang	・Posisi melempar dan memasukkan bola disesuaikan dengan kemampuan siswa.

（３）授業の実際

授業の中では、ほとんどの児童が全ての活動内容において積極的であったと言える。

それぞれの活動場面を取り上げると、「１　準備運動・ストレッチ・お祈り」では、これから活動する種目への期待もあってか真剣な表情であった（写真２）。

「２　ＷＡＬＫ」では、運動の基本に忠実に従いながら落ち着いて活動していた。またその中でお互いに意識しながら競争している姿が見られた（写真３）。

「３　Ｓｉｌｉｎｇ　ｗａｌｋ」では、タイヤにさわらないように気をつけながら素早く活動していた。

「４　Ｒｕｎ　ａｎｄ　ｊｕｍｐ」では、グループでの競争を取り入れていたので、隣で走る友達を意識してタイヤまで競争していた。

「５　Ｓｉｄｅ　ｓｔｅｐ」では、児童ひとりひとりの左右への移動能力に気をつけながら、投げる速さや高さ、距離を考えて活動を促した。（写真４）

写真２

写真３

写真４

「６　Ｒｕｎ　ａｎｄ　Ｈｉｔ　ａ　ｂａｌｌ」では、児童の走る速さとボールを投げる担当者との位置関係に気をつけながら、挑戦できる運動範囲に投げ入れ、児童の表情からは積極的に運動したという達成感が見られた。

（写真５、６）

写真５

写真６

「７　整理運動・ストレッチ」では、Lilis Mariana 先生を中心に、たくさんの運動をこなした児童ひとりひとりに向かってにこにこしながら、表情豊かに声をかけていた。 児童もその先生からの働きかけにうなずいて緩やかな運動をこなしていた。

３．協働授業研究のまとめ

当日のメインティーチャーである Lilis Mariana 先生は
前回よりも落ち着いて指導に当たっていた。
これはインドネシアでは、授業を参観されるという経験が
あまりないことやほとんどの授業をひとりで担当すること
が多いことから比べると、前回も今回もサブティーチャーがいたことで事前や授業においても授業の流れや内容の確認をしたりする相談する相手がいたこともあると思う。
また授業が終了した後での参加した児童からは、十分な運動量への満足感が表情から読み取れたことと、児童の感想からも「楽しかった」などの言葉が多く聞かれた。このようなことから、指導案を協働で作成した今回の取り組みの意義は大きかったと感じる。

算数における協働授業研究

東京都立あきる野学園養護学校
泉　慎一

１．授業研究について

（１）教科：算数

（２）対象：知的障害養護学校小学部児童６名

（３）指導内容：分数・小数の基礎「はんぱのはかり方」

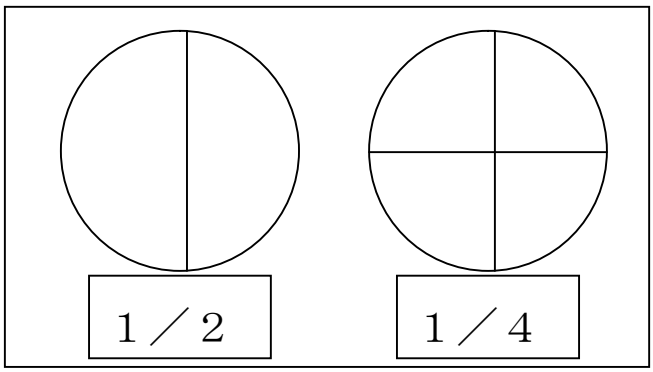
２．授業研究の実際

（１）子どもたちの実態

まず、子どもたちの様子を知るために、授業前日にインドネシア側の教師と子どもたちと顔合わせをした。対象となる児童は６名おり、全員自分の名前を言うことができる。１から１０までの数唱も全員可能であった。詳細な子どもたちの実態を知ることはできなかったが、授業のなかで、ある程度のやりとりが可能であることは分かった。ただ、全員が分数や小数の内容を指導することが適切であるかどうかは分からなかったが、インドネシアのナショナルカリキュラムに基づいた指導を展開しているということであった。

（２）指導案の作成

今回の協働授業研究を行うに当たり、筑波大学教育開発国際協力研究支援センター長・中田英雄教授および宮崎大学・草野勝彦教授を中心としたミーティングの中で、「よりよい実践」を進めるためには、「学習指導案の作成」が大きなポイントになるはずで、協働授業研究をすすめるにあたり指導案の協働作成をすることが確認された。また、協働授業研究をすすめるにあたっては、日本側の授業研究を紹介するだけでなく、日本側およびインドネシア側の教員それぞれがチームを組んで実践していくこととなった。そこで、インドネシア側の教員である、サイフラー先生と指導案の作成についての話し合いを行った。指導内容は、サイフラー先生が分数の授業を行っていたこともあり、分数・小数の基礎「はんぱのはかり方」を行うことにした。その中で、考え方の基礎として、インドネシアのナショナルカリキュラムについての話を聞くことができた。



インドネシアでは、分数を教えていくときに、１／２→１／４というように進めていくことになっており、１／３などについてはその単元の中では取り扱わないことになっているという話があった。

サイフラー先生による授業実践の中では、お菓子を使い 2 つに切って１／２を説明するなど教材の工夫や、ワークシートを用い、「ふりかえり」をさせるなどの指導の工夫があった。これらのことをもとに、発展させて行く方向で話し合いをすすめた。まず、日本側からは、「コップだけを使って、はんぱ（あまり）の意味を知り、分数の基礎を学習する。」ことと「身近にある教材を使い、等しく分ける方法を学習する。」ことをねらいとして、指導を進めていくことを考えることを提案した。「なぜ、コップを使うのか？」、「どうしてはんぱの意味を知る必要があるのか？」などの質問があった。これらを中心に協議をすすめた。連続量（単位を作って、それではかる量：水や長さ、速さなど）を測るときには、はんぱが出ることがあり、このはんぱ（あまり）から分数・小数の概念がうまれてきたことを話し合い、この意味を知ることがまず大切であることをお互いに確認し、実際の流れをつくることにした。

指導案作成を進める中で、コップやペットボトルなどを用意してもらい、実際の授業をイメージして、模擬授業を行った。「ここで子どもに考えさせる」という場面や「ここでは、はんぱを取り合うことをイメージして演技でけんかを取り入れる」など、子どもを主体とした展開を、お互いに意見を出しながら作ることができた。また、子どもたちがコップに水を入れて分けるなどの実際の操作を取り入れると、指導内容が定着しやすいという話をすると、早速そうしていこうという方向になった。また、インドネシア側が行った授業研究の中で、ワークシートを使用してその日の授業をふりかえるという良い実践を行っていたことから、そこは継続していこうと話をし、準備を依頼した。しかし、サイフラー先生は、「どこかになくしてしまったから、もうない」と話した。詳しく事情を聞くと、先んじて行われた授業研究の話し合いの中で、参加者からの批判的な意見に腹を立て、捨ててしまったから用意したくないということであった。その件については、ワークシートや板書の使い方などのサイフラー先生の良い点を指摘し、その後は教材準備等、快く快諾してもらえた。

作成した指導案とワークシート（日本語とインドネシア語）を次ページに示した。

指 導 案

日 時:2005年8月11日

指導者:泉 慎一(T1)、M.Syaifullah(T2)

1. 授業名

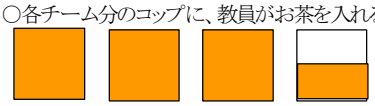
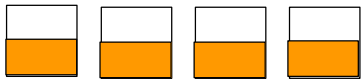
分数の意味　～はんぱ(あまり)の意味を学習する～

2. 単元の目標

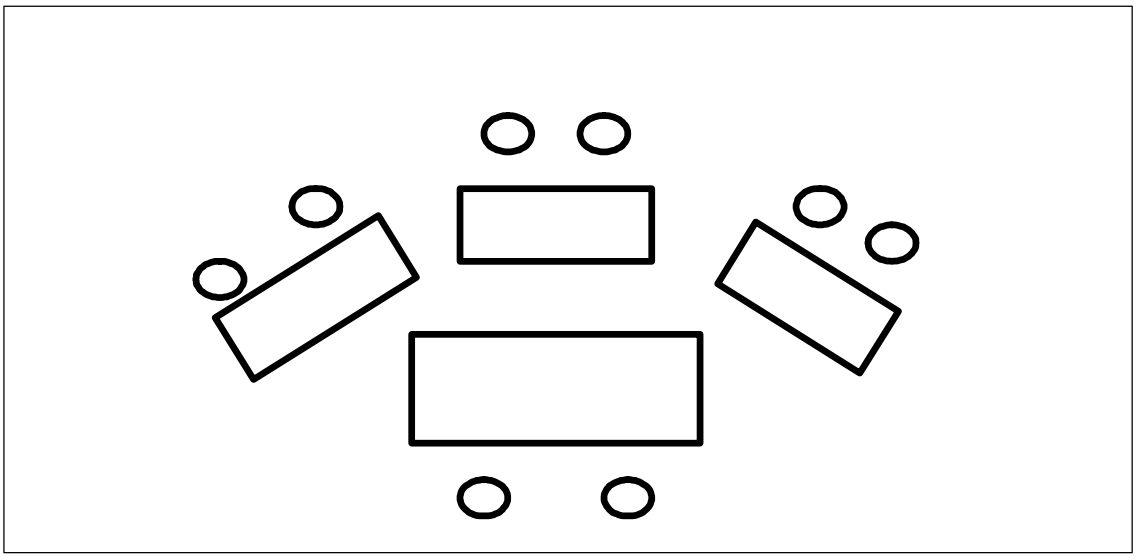
コップだけを使って、はんぱ(あまり)の意味を知り、分数の基礎を学習する。

身近にある教材を使い、等しく分ける方法を学習する。

3. 本時の授業

時間	学習内容	留意点・配慮事項
導入 5分	○チーム発表 ○挨拶をする ○昨日の復習	○ あらかじめ決まっているチームを発表する。(教材①) ○ 教員が主導の挨拶をする。 ○ 呼名をする。(元気に返事をするように促す) ○ 昨日学習した内容を振り返り、ワークシートに記入する。 ○ 教員は、ワークシートの内容をチェックする。 ○ 出来たら、賞賛する。
展開 30分	○のどが渇いたので、お茶を用意して欲しいとお願いする ○ペットボトルに用意したお茶を入れる ○教員が泣いていやがり、子どもたちのチームのコップをとろうとする。 ○どうしよう？と子どもたちに考えさせ、意見があれば紹介する。 ○正解を教員が発表する。 ○教員の正解をもとに、各チームで実際に操作する。	○各チームのコップとお茶を用意する。(教材②) ○各チーム分のコップに、教員がお茶を入れる。  ○教員チームのコップだけ、お茶が少なくなるようにする。 ○もう一人の教員が注意すると、けんかになってしまう。 ○けんかは×の紙を提示する。(教材③) ○ 各チームに4つのコップとお茶を配り、少し考えさせ、子どもたちに意見を求める。 ・意見があれば、前に出て紹介する。 ・良い意見が出たときは、みんなで賞賛する。 ・意見が出ないときは、あらかじめ用意しておいた回答を教員が発表する。 コップにマジックで線を書き、はかりを作る。それを利用して、みんな等しくコップに水が入るようにする。  ○子どもたちの操作を教員はサポートする。 ○出来たチームを賞賛する。
まとめ 5分	○授業をふりかえる ○挨拶をする	○ワークシートを完成させる。(教材④) ○子どもたちが、感想を発表する。

4. 配置



5. 教材準備

教材① あらかじめ決めてあるチームを書いた紙を用意する。
教材② コップ 16個、お茶の入ったポットを4つ
教材③ けんかはXの紙
教材④ ワークシート、ワークシートの記入例

ワークシート
名前＿＿＿＿＿＿

１．どうして先生たちは、けんかしてしまったのでしょうか？

それは、お茶をコップに入れているときに、（　　）があったから。みんな、仲よくお茶を飲むために、（　　）を使いました。

２．今日の勉強はどうでしたか？（感想）

Lembar Kerja
Nama＿＿＿＿＿＿

１．Kenapa guru- guru itu bertengkar?

Mereka bertengkar karena ketika menuangkan teh ke dalam gelas, teh itu ada ……..nya. Supaya semua orang bisa minum teh dengan jumlah yang adil, maka harus di……

２．Bagaimana kesan tentang pelajaran hari ini?

（３）授業の実際

①教材の準備

本授業研究で使用する教材としては、指導案にも記してあるが、①あらかじめ決めてあるチームを書いた紙、②コップ１６個、お茶の入ったポット４つ、③けんかはＸの紙、④ワークシート、ワークシートの記入例を用意することとした。

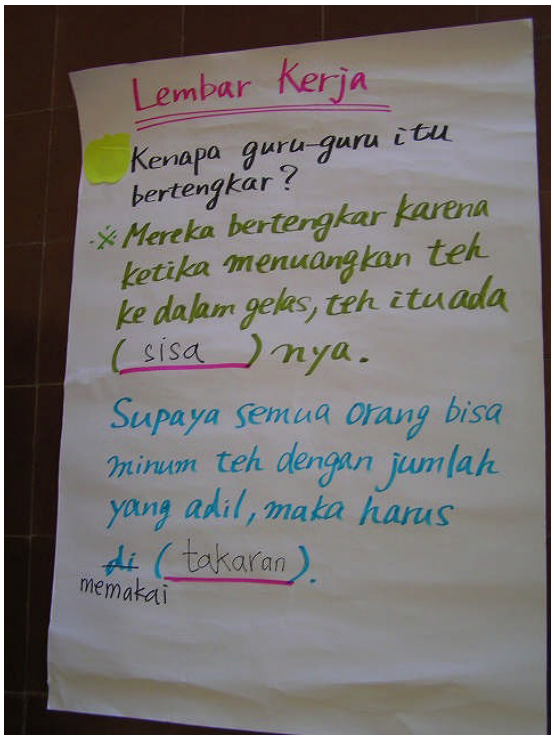


写真１　教材④ワークシート記入例

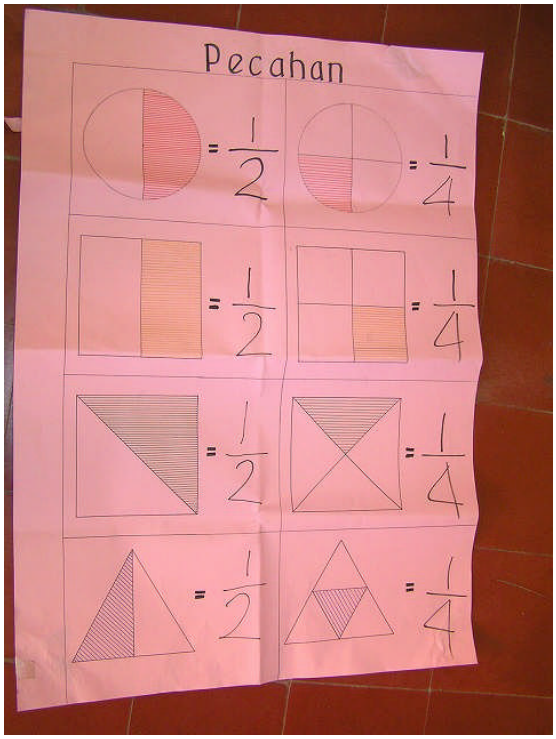


写真２　教材④ワークシート記入例

写真３　教材③　けんかは×

②授業の実際

実際の授業が始まり、教材が出てくると子どもたちは「何が始まるんだろう？」と言わんばかりの表情をしていた。まず、教師がペットボトルに入ったお茶を分けて、その過程で意図的に一方に多く注ぐようにし、わざとけんかをすると、より一層子どもたちが関心を示す様子が見られた。続いて、「どうすればいいのか」ということを子どもたちに聞き、「班ごとに仲良く分けて欲しい」と提案すると、子どもたちはそれぞれに操作を始めた。子どもたち同士がお互いに、分け方について語りはじめ、サイフラー先生が適切に机間巡視をはじめ、丁寧に指導していた。授業中の、教師からの質問に対する子どもたちの応答が積極的であった。

写真４　授業の様子

写真５　生徒が実験している様子

③授業研究のまとめ

当日のメインティーチャーは日本側、サブティーチャーはインドネシア側の教員が行うこととした。実際の協働授業の場面では、サイフラー先生は先んじて行われた授業研究の

反省などを忠実に守りながら、指導にあたっていた。また、本人いわく、前回の授業研究では「緊張」したが、今回は「それほどなかった」と言っていた。これは、指導計画を作成したことと、作成の段階で十分に話し合いをしたことでそのようにできたのだと考える。また、子どもたちは、授業中もサイフラー先生の演技に共感し、興味・関心を引いていた。授業の最後に渡したワークシートにも丁寧に記入し、二人で子どもたちに「バグース」と子どもたちを賞賛し、授業を終えた。　その後の本授業研究の協議の中では、「サイフラー先生は前回と違い、落ち着いて生き生きと授業を行っていた」、「上手に分けないとけんかになってしまうことなど、道徳的な内容を取り入れたことが良かった」などと意見をいただいた。

４．協働授業研究の意義と成果

事前のミーティングの中で、「Good Practice」、「学習指導案の作成」を大きな柱として位置づけた。事前に行われた、セミナーの中では、インドネシアにおいて「学習指導案」の作成はあまり行われていないことが明らかとなった。このことも受け、インドネシア側にレクチャーをしていくというものではなく、子どもたちを中心に据えながら、日本側、インドネシア側がお互いによりよい授業作りをしていくために、「学習指導案の作成」を進めていくこととなった。インドネシア側の授業研究では、「教師が緊張してしまった」という反省を出していたが、「指導案」作成後の協働授業では、「それほど緊張せずにできた。子どもの様子も見ることができた。」と話していた。このようなことからも、指導案を協働で作成した意義は大きかったと感じる。

また、２日間にわたり、ワークショップ形式で、大学の先生、教師、保護者、福祉ソーシャルワーカーの４つのカテゴリーを作り、授業研究についての評価・反省を行った。この時は、あまり意見が出ないのではないかとも考えていたが、予想に反し、非常に活発に意見交換がされた。これは、インドネシアにおける障害児教育への関心の高さを示していたと感じると同時に、このような形式での協議をリードした CRISED の役割の重要性を確認した。

最後に、この「途上国における特別支援教育開発の国際協力に関する研究」に参加して、インドネシアの障害児教育に触れる機会を設けて下さったことに心より感謝します。特に、このような機会を設け、世界中の子どもたちのために惜しまず支援を進めている、筑波大学教育開発国際協力研究センター長・中田英雄教授、インドネシア滞在中に的確に指導・助言を下さった、宮崎大学・草野勝彦教授には心より感謝します。また、本研究に携わった先生方皆様に心より感謝申し上げます。

算数における公開授業

筑波大学附属大塚養護学校
北 村 博 幸

１．はじめに

平成 17 年度科学研究費補助金［基盤研究（A)］「途上国における特別支援教育開発の国際協力に関する研究」の一環として、インドネシアのスラバヤにおいて、知的障害のある児童を対象に、現地と日本の養護学校教員による協働授業研究及び公開授業に関する研究協議を実施した。

授業研究の公開授業として、算数及び体育を実施した。算数については、①日本の教員２名のチームティーチングによる授業、②インドネシアの教員２名のチームティーチングによる授業、③インドネシアの教員 1 名と日本の教員１名のチームティーチングによる授業、の３つを実施した。

研究協議は、それぞれの授業の良い点を話しあうことを目的に、グループ協議及び全体協議を実施した。

以下に、日本の教員２人のチームティーチングによる公開授業及び研究協議の内容と成果を報告する。併せて、研究協議で指摘された課題を整理し、今後の途上国教員と日本人教員の協働授業研究の可能性について検討する。

２．公開授業

⑴設　　定

学　校：SLB　NEGERI　GEDANGAN　SIDOARJO　SURABAYA
対　象：小学部低学年６名（男子４名　女子２名）
指導者：日本の知的障害養護学校教員２名（男性２名）
教　科：算数
時　間：40 分

表１　よい授業のための要件

- **豊富なコミュニケーション**
- **先生の豊かな表情**
- **児童に対してほめる行為**
- **教材・教具の工夫**
- **楽しい授業**
- **多要素の授業**
- **活動的な学習**

⑵授業計画

授業の計画に際しては、平成 16 年度新世紀国際教育交流プロジェクト「インドネシアの特別支援教育開発に関する教育協力ー日本及びインドネシアの教師による知的障害及び聴覚障害児童に対する協働研究授業ー」の研究協議でまとめられた、よい授業のために必要な７つの要件（**表１**）が充分に充たされるように留意した。

①アセスメント

授業の計画の第一段階として、アセスメントを実施した。

本来、アセスメントは、「子ども本人と取り巻く環境に関する情報を多面的に収集し、分析・解釈することを通して、子どもの全体的状態像を把握し、指導を見通すプロセス」であるといえる。しかし、60 分という限られた時間で、通訳を介して担任からの聞き取りを行うという、制約された状況でのアセスメントであったため、必要な情報として「性格・行動特性」「数量に関する能力」の２つの観点にしぼって行った。

②指導案

担任から聞き取りの結果、対象児童は小学部の低学年であり、数の概念が充分に獲得できていないことが推察されたため、ゲームの要素を取り入れた活動的な授業を行うことにした。

具体的には、日本の双六を取り入れた「すごろくゲームー数を数えようー」という名称の授業とした。

授業の目標は、以下の２つとした。

・ルールにしたがってゲームをすることができる

・10 以上の数を数え使うことができる

授業の流れとしては、導入 5 分、展開 30 分、まとめ 5 分で計画した。

授業の評価の観点としては、以下の 5 点とした。

・授業の目標は達成できたか

・個別の目標は達成できたか

・指導案は適切であったか

・教材・教具は適切であったか

・指導方法は適切であったか

その他、指導案には「教材・教具」及び「教室配置図」を示した。

③教材・教具

知的障害養護学校の教材・教具は、子どもの知的発達水準や興味・関心に応じて自作されることが多い。そこで、教材･教具については､インドネシアで材料を全て調達し、自作した。(表 2)

また、教材・教具のうち「サイコロ」と「くじ」はあえて半完成品とした。その理由は、対象児童が授業に使う教材・教具を自分で作ることを通して、授業への興味・関心を持たせ、動機づけを高めるためである。

「サイコロ」は、段ボールを利用した直方体と紙に書いたサイコロの目の二つの部品を作成した。「くじ」は、厚紙を材料とする三角柱と対象児童をデジタルカメラで撮影しプリントした写真の二つの部品を作成した。

表 2 自作教材・教具

・掲示物「授業の目標」
・掲示物「授業のめあて」
・掲示物「すごろくのルール」
・くじ
・こま
・サイコロ
・すごろく

表 3 ことばのカテゴリー

・あいさつ
・授業内容
・説明・指示
・称　　賛

実際の授業場面で、対象児童全員に作らせた。

④ことば

授業中のことばに関しては、できるだけインドネシア語を使用しないことを基本とした。

対象児に常に意識させておきたい「授業の目標」「授業のめあて」「すごろくのルール」に関しては、掲示物としてインドネシア語で示した。

また、授業を展開する上で、どうしても使用しなければならないインドネシア語に関しては、**表 3** に示したカテゴリーに分類し必要最小限になるように留意した。

⑶授　　業

①チームティーチング

実際の授業では、2 名の教員は明確に役割をもって授業を展開した。

1 名はメインティーチャーとして授業の進行を中心とした全体指導の役割を担った。もう 1 名はサブティーチャーとして、対象児のそばで個別の指導を担った。

②授業の留意点

対象児に対しては、授業のめあてとして２つの点を示した。

一つは、心理的なめあてとして「楽しく積極的に授業に参加しよう」というものであり、もう一つは、行動的なめあてとして「友だちの学習活動をしっかり見よう」というものであった。

これらのめあては、掲示物にして明示し、授業中は常に留意させた。

また、知的障害のある児童の学習に関する特性をふまえ、併せて、学習への動機づけを高め、注意・集中が持続できるように、授業に「活動性」「操作性」「具体性」「実際性」「ゲーム性」の要素を含め、ダイナミックな授業になるように特に留意した。

③ピアチュータリング

また、6 名の対象児を 2 名ペアにし 3 つの学習グループを作った。グループ作りは、自作の教材・教具の一つであるくじを使って行った。

授業中はできるだけグループ２人で、協力したり、相談しながらの学習になるように留意した。

図１　日本人教師による授業

図２　インドネシア人教師による授業

３．研究協議

日本の教員２名のチームティーチングによる授業及びインドネシアの教員２名のチームティーチングによる授業の終了後に、それぞれの授業に関する研究協議を実施した。研究協議は、グループ協議及び全体協議の形態で行われた。グループ協議は、教員、校長、学生、研究者、行政、保護者、等のグループにより討議された。全体協議では、各グループで討議されたポイントの報告がなされた。

以下が、研究協議で指摘された、日本の教員２名のチームティーチングによる授業における良かった点と反省点である。

⑴良かった点

・簡単に手に入る材料で教材や教具が作られていた
・教材や教具が子どもの興味を引くものであった
・子どもの気持ちを配慮しながら授業を進めていた
・適切に子どもをほめていた
・ゲーム的な要素で活動的であった
・子どもたちが活き活きと勉強できていた
・指導案がわかりやすかった
・授業が指導案通りに展開されていた

⑵反省点

・子どもの様子と授業の目標がかけ離れていた
・先生の活動も子どもの活動も多すぎた
・サイコロは賭事に使うものであり悪いイメージである
・子どもの評価が不充分であった

４．おわりに

公開授業の反省及び研究協議における意見から、インドネシア（途上国）の教員と日本の教員との協働授業研究を行うに際しての３つの課題が明らかとなった。

１点目は、アセスメントについてである。

反省点として、「子どもの様子と授業の目標がかけ離れている」「子どもの評価が不充分であった」と指摘された。これは、授業の前のアセスメントが充分にやり切れなかったことが大きな理由である。

指導案を作成するのには、子どもの「行動特性」「性格」「知的発達水準」「授業に関わる学習到達度」は、最低限必要な情報である。これらの情報を 60 分間で担任から聞き取ったわけであるが、通訳を介していたため正味は 30 分間であった。併せて、担任は子どもの知的発達水準は非常に低いと話していたが、日本の子どもにあてはめると、養護学校に在籍する子どもではなく、特殊学級に在籍する子どもの知的水準であった。結果、特殊学級に

在籍する子どもに養護学校の指導案で授業をしたことになった。

これらアセスメントに関する課題は、短時間で記入できるチェックリストの開発等の工夫で改善が期待できる。

2 点目は、文化・風習についてである。

反省点として、「サイコロは賭事に使うものであり悪いイメージである」と指摘された。サイコロを使用したことにより、対象の児童や参観者に不快な思いをさせた可能性がある。

こういった文化・風習の相違による違和感は、従来より外国との交流において最も留意することとして、指摘され続けていることである。

これら文化・風習に関する課題は、指導案及び教材・教具のアイディアの時点で現地の責任者にチェックしてもらう等の工夫で改善が期待できる。

研究協議では指摘されなかったが、日本の教員２名本人の授業反省として、ことばの問題があった。40 分間の授業を流れよく展開させるために、慣れないインドネシア語に頼った部分があったが、逆に授業の展開をぎくしゃくさせた可能性があった。

しかし、教科学習の授業では、全くインドネシア語を使用せずに授業を展開することは不可能である。特に、「授業の目標」「授業のめあて」「学習のポイント」に関しては、常に子どもに意識をしておいてもらいたいものであり、インドネシア語で伝える以外にない。

ことばに関する課題は、インドネシア人と日本人のチームティーチングによる授業や掲示物を利用する等の工夫により改善が期待できる。